

中 田 邦 造 の 読 書 学

－ 読 書 現 象 の 基 本 類 型 －

梶 井 重 雄

目 次

一. 序

二. 主体主義的読書

1. 感 興 読 書

イ. 知的感興読書

ロ. 意的感興読書

ハ. 情的感興読書

2. 教 養 読 書

3. 慰 安 読 書

4. 休 養 読 書

三. 事象主義的読書（客観主義的読書）

1. 実 用 読 書

2. 情 報 読 書

3. 調 査 読 書

4. 研 究 読 書

四. 人生主義的読書

1. 学問的読書

2. 修 養 読 書

3. 鑑 賞 読 書

4. 求 道 読 書

一. 序

私はかつて中田邦造の読書指導について論じ⁽¹⁾ 次の3期にわけた。

第1期、1926年（大正15. 30歳）1月～1940年（昭和15. 44歳）3月－読書指導の実践活動期

第2期、1940年（昭和15. 44歳）4月～1949年（昭和24. 53歳）9月－読書指導の普及対策期

第3期、1949年（昭和24. 53歳）10月～1956年（昭和31. 60歳）11月－読書指導の理念体系期

この第3期については「第3期は退職後、昭和25年（1950）9月より同26年（1951）3月までは

I F E L図書館学専任講師として、又、日本図書館協会顧問として活躍され、昭和31年（1956）

11月15日死去されるまでの期間であり、此の間「読書学」の研究に従事、「読書学」に関する浩瀚^{こうかん}

なる遺稿を残し、かつその立場から読書指導論の理念化を究明された時代で、此の期間を読書指

導の理念体系期と称する。』⁽²⁾ とした。この『読書学』に並行して書かれたものに『宗教読書

について』がある。これは金光図書館報「土」に昭和24年12月から昭和27年2月までの7号から20号まで11回にわたって発表されたものである。

私は先に日本図書館協会から出版した『個人別図書館論選集 中田邦造』⁽³⁾にその年譜と解説を加えたが、遺稿の中『読書学』に関するものは、A、読書現象論（400字詰原稿1193枚）B、読書技術論（同403枚）C、読書における自由と自在の問題（同313枚）でいずれも未発表のものである。

中田邦造氏の諸論文は哲学的宗教的理念に富んでおり、そのルーツを禅と西田哲学に負う所が大で、氏の禅学の師は飯田樸隠（^{とういん}1863-1937）であった。また夫人の中田文子さんはクリスチャンであり、二人娘の一人素美さんもクリスチャンであった。私は昭和15年4月1日に文部省図書館講習所に入学、それから丸1か年間、氏の家庭から通学した経験を持ち、それより先、氏が石川県立図書館長時代に、これも丸1か年、私の能登の自宅で開設した青少年文庫に於て毎月氏のご指導をうけた。氏の『読書学』は氏の深い教養と実践から生れた、みのり豊かな果実である。

読書現象の八要因

氏は先ず読書現象の真相を把握するためにすべての読書現象に共通するものとして次の八要因をあげる。⁽⁴⁾

- 1) 読書主体——誰が読むか。読む人は図書に対して読書活動の能動者であるから、我々は、これを呼ぶに読書主体の名を以てする。
- 2) 読書対象——何を読むか。読むとは何かを読むことであって、その場合読まれる図書資料は読書活動の受動者であるから、読書主体に対して読書対象と呼ぶ。
- 3) 読書目的——自ら欲するものを読む。主体が対象に働きかけるには何らかの目的をもってしていることが認められる。主体が読書対象に働きかける動因を読書目的と呼ぶ。
- 4) 読書方法——読書目的を実現するために読書主体が読書対象に働きかける仕方を読書方法とする。
- 5) 読書作用——読書方法を実行に移して対象に働きかける主体の働きを読書作用という。如何なる読書も瞬時に終ることではなく若干の持続時間をもつ。作用はその持続活動の作用面をいうのである。
- 6) 読書内容——読書作用によって読書対象たる図書の内容が消化されて、主体に受け入れられるものは読書内容である。
- 7) 読書効果——読書内容を受け入れたことによって主体の受けた影響を狭義の読書効果という。それに対して読書活動によって主体が受けた総合的影響を広義の読書効果という。読書効果こそは読書活動の最終のねらいである。全心全霊⁽⁵⁾をあげて読むに足る図書を選んで、全心全霊をあげて読書する効果の偉大さは測りがたいものがあるであろう。

- 8) 読書環境——読書現象が現実に行われる場をそのもつ諸条件⁽⁶⁾を含めて読書環境と呼ぶ。氏はまた読書の基本目的に着眼点をおいて、読書現象の類別を考え、3つの基本的類型を試みる。⁽⁷⁾

1) 主体主義的読書類型——生活主体の意欲関心から発して、現在の意欲関心そのものの満足のためにする読書である。何を如何に読むかは中心的な問題でなく、専らその時その時の主体の満足を得ることを目的とする。即ち生活主体の基本目的によって類別するものであって、読書主体の満足の主とするものが主体主義的読書類型である。

2) 事象主義的読書類型(客観主義的読書類型)——客観的な価値を知識として把握しようとする目的の読書である。それが自己において実現せられるためには、自己の主体的立場は放棄せねばならず、現在の自己の力で十分に把握できぬ場合には先ず自己を鍛え準備をしてからでも、それを把握しようとするものである。即ち読書対象を客観的に把握して言わば著述精神の再現を期するものが客観主義的読書類型である。

3) 人生主義的読書類型——客観主義的読書によって著述精神を摂取し、そのことを通じて主体の生命の基本的発展をはかろうとするのが人生主義的読書類型である。

二. 主体主義的読書

主体主義的類型とは、生活主体が読書を意欲する場合、その基本目的が読書によって主体の現在の生活を賑わし、教養付け、慰安し休養させるといったような直接に主体的な満足を得ることにあつて、読書内容に対する客観的評価如何を問わないような性格の読書を代表するものである。読書によって生ずる価値の適用を個別的な主体のためにすることを目指している。こうした読書が読書現象界の重要な一領域を占めていることもまた疑のないところである。

主体主義的読書の類型は小類型として、1. 感興読書、2. 教養読書、3. 慰安読書、4. 休養読書をあげることが出来る。1の感興読書は興味本位の読書であるが、これをまた主知的・主意的・主情的にわけて、イ. 知的感興読書、ロ. 意的感興読書、ハ. 情的感興読書とする。

1. 感 興 読 書

イ. 知的感興読書

知的感興読書は所謂好奇心に発する感興読書の一種である。その核心が知的関心の覚醒にあるものが知的感興読書である。知的感興を目的とする読書に心ひかれるものは青少年のように、知的発達期にあるものが多く、何かにつけて新しい知識が関心の対象になりがちである。

出発点は好奇心であっても啓蒙的な手引書によって次第に事象自体に興味を生じて学術的な図書に眼がひらけてくることにもなれば、それはまた新しい読書への健全な展開ということにもなるわけである。

知的感興読書は所謂珍書奇書を読みあさるというように枝葉末節的読書に陥る危険もなくはないが、多くの場合はそれが事象主義的読書や人生主義的読書に転化し発展する準備段階となる可能性をもつものである。

ロ. 意的感興読書

意的感興読書とは実践的興味をもってする感興読書である。意的感興読書の対象となる図書類は、歴史・伝記類を主とするものであるが、その場合史的真实性そのものは必ずしも問題になら

ず、正史の人物伝にしてもそれを文芸化したもの、興味本位に異状化して描いたものはもとより、奇人の奇行を誇張したようなもの、冒険談・探険記・探偵小説等或は天才的悪人や異常人物ないし妖怪変化的存在についてのグロテスクな読みものであることが多い。それらの図書が商業主義的宣伝によって普及し、多数の読者によって、その主観的評価が伝播し、批判眼をひらくことなしに異常行為の高まりを刺戟するような場合は、生命の内容的進歩がとどこおり、低調な生活水準において悪や過失に深入りする危険もなくはない。しかしこの場合も、適切な図書にめぐりあって、よき指導のもとに誘導されて人生主義的読書に転化されてゆくときには、それが自己の能力を異常に発展させ、強い修養心を涵養して、健全にして創作力や開発力のある人物となることも期待されるわけである。

ハ．情的感興読書

情的感興読書は狭義の娯楽読書を意味するものであって、何を読むというよりも情的な満足を得ることを主とする読書である。情的な満足は普通に「面白い」という言葉で表現されるような感味をもった読書である。

読書主体が充分発育していない状態においては、特に滑稽だとかおかしいとかいったものに終始する傾向があるが、すこし進めば劇的な内容をもつ面白さとして、悲しさも苦しさも恐しさもその対象となり、更に喜怒哀楽的な内容にかかわらず、人生的興味、社会的生活の興味すらが情的感興の対象となるものである。「面白い」ということは何らかの主体にとっての価値であって、高尚な面白さを最も興味深く感ずるためには、その主体がその程度の高尚さを属性とするまでに成育していなければならぬわけである。

一応万人向きの情的感興の対象となるような図書としては文芸的制作の類をあげなくてはならない。特に肩のこらぬ小説類などは大衆向とされ、純粹の詩歌になると鍛えられた鑑賞力を必要とするものと考えられる。漫画類やエロティシズム等になると多少病的症状を呈しはじめたものということが出来る。

幾多の能力的訓練を経、準備経験を完了した後に、初めて感興を充分に感得し得るということもあり得るが、そうした鍛えられた鑑賞力を必要とする読書は、後述するように、すでに鑑賞読書に転化したものと考えべきである。

以上3種の感興読書について述べてきたが、それらは読書に慣れぬ人々を読書に導く最初の誘導力である。そして多くの人々に様々の読書のひろがりを知らせる端緒となるものである。感興読書は読書方法としては単純平易であって、読書そのことには何の苦勞も感じないところに、その成立の条件がある。従って感興読書には面白い本を発見する以外に読書技術らしいものの殆んどないのが常である。感興読書は何としても読書生活に経験の少い人々によって最も多く最初にえらばれる読書の類型であるが、それはまた人生を潤す最も大切な読書であるということができる。

2．教養読書

教養の意味——広義の教養は主体化された文化の総称と見るべきものであって、欧米語の Kul-

tur や culture と考え合せると理解し易いであろう。狭義で現在日本に於て用いられているものに様々ある。生活主体の或状態に対する形容詞的意味では「教養がある」というように、野卑とか粗野とかいった状態に対する対照語となっている。即ち文化的に訓練された主体のもつ価値を意味している。動詞的に用いられる教養は、或主体に教養ある状態を実現する、ということ、即ち「教養を身につける」ということで、それは文化価値を受容れてそれをこなす徳能をもつことを意味する。その本質は文化価値の生活価値としての理解力であり鑑賞力である。従って教養は如何なる専門の範囲にも制限されることなく、あらゆる専門的文化内容に対して包括的な総合的な理解をもつものである。

教養があるということは文化領域に対して一応あらゆる価値の秩序を把握することができると共にその受け取り方においても、受動的な理解ばかりでなく、多少とも鑑賞的であり、何らかの意味で実践的であるということもできる。この場合実践的とは、理解や鑑賞が単に追従的に行われるばかりでなく、批判的であることを意味するのである。

教養読書の意味——教養読書というのは教養的效果を目的とするところの読書をいうのである。読書の態度方針方法等が自ら教養的效果をおさめるに^{ふさ}適わしく決定され、何処までも理解を徹底させ鑑賞に重きをおき、知識の人格的秩序立てをはかるといったところに努力を払う故に実質的に教養的效果をもたらすことになるわけである。たとえそれが自発的に行われなくても、よき指導媒介の下に青少年の読書が行われるといった場合、読書主体自らは唯興味本位の読書をしているに過ぎないにしても、読書の出発に先立って読書上の心得が決定され、途中において質問の形で重要事項に注意を促され、読書後に反省の形において、問題の焦点をはずさぬように要点に導かれ、時には若干の点において、反読する必要を感じずような関心を喚起されるといったことによって、有効なる教養読書を成就することができるわけである。

直接そうした立入った読書媒介を受けないまでも、常々よき読書経験者から教養読書についての経験談をきいたり、すぐれた教養向図書について解説をきいたり、或は^{しんし}真摯な読書態度を見せつけられたりして、教養読書に関してよき人的環境をもつ場合にも読書主体は、直接指導を受けると同様に効果的な教養読書をすることができるようになるものである。

教養向図書——教養読書の特性は如何なる図書を読むかということよりも如何なる読書態度をとるかということを重視すべきであって、従って厳密な意味で教養向図書と他の種類の図書と区別されるとは考えられない。このような基本条件を念頭においても、教養的態度をもって立ち向うに適わしい図書は何かということも充分研究に値するであろう。

さてそれでは教養向図書の名において取り上げられている図書の選択の根拠となるものは何であるか。次の3点に要約できよう。

第一は著者自らが教養目的の図書として著述した図書である。第二は、読書媒介の立場にある人々によって教養的図書として適わしいものと認められている図書類である。第三は読書主体自らによって自己の教養読書にとって最も適わしいものとして受けとられる図書類である。

教養向の図書として著述されたものは一応教養読書の対象として適わしいものといえるが、そ

ういう類のものばかり読むことは生命のない教養の技巧化を生ずる危険が警戒されねばならない。それに対して、広く教養図書として認められている図書類には、最も典型的な古典類などを含めてのことであるが、それらは図書として申分ないものと言えよう。また自ら認めて最適の教養書とするものは、或は指導者の推薦によることもあり、自らの力でその価値を認めるものもあるが、すでに自らに対象の発見力が生じた以上は当然多方面の意見を参考しながら自らの判断によって決定すべきである。結局充分学んだ上での自主的選択が唯一最善のことになるろう。

ここにいう教養読書の意味は一面的な読書ではない。人生の主要諸問題を一点から見得るような見識を養うことなしに一事に深入りすることは教養的読書ではない。また諸方面の概論的な知識を読みあさり、浅薄な「物知り」となることでもなく、広い知識が或程度に理解せられ鑑賞せられ、実践的な立場から総合的に批判的にも見得ることを条件とすれば広いことは望ましいことである。

このように見てくると、教養図書とは如何なる一冊の図書でもなく、また無暗^{むやみ}に広く濫読することでもなく、内容的に秩序立てられた一群の図書にあるということができよう。その図書群は精神年令と共に逐次構成し直されねばならぬが、読書主体が或程度の発達を遂げた後においては、その群中には相当数の各方面の古典や特別な愛読書が含まれて核心をなしていることが要求されるであろう。

古典と教養——古典とは遠い過去に生れて現在になお生命をもっている図書である。事象内容としては古くなっているが、著述精神としては最も鮮かに活きているものである。従って古典について読心的読書⁽⁸⁾をすることは人間の教養として最も適わしいことと考えられるのである。氏はまた、次のように、ヘルマン・ヘッセのことば⁽⁹⁾をひく。

真の教養はなんらかの目的のための教養ではない。それは、完全なるものへのすべての努力と同様に、その意味をそれ自身のうちに持ってゐる。肉体的な力や敏活さや美しさへの努力が、なんらかの、例へば、我々を金持に有名に強力にするといふやうな究極的目的を持たず、我々の生活感情と自信とを高め、我々を一層楽しく幸福にし、安心と健康との一層高い気持を興へるといふ風に、その報いをそれ自身の中に持ってゐると同様に、「教養」への、即ち精神的完成への努力も、なんらかの限られた目標への骨の折れる道ではなくて、我々の意識を幸福にし強めつつ拡大することであり、我々の生活と幸福との可能性を豊かにすることである。それ故に真の教養は真の体育と同様に、実現と同時に刺戟であり、到る処で目標のそばにあると共に、いかなる処でも休止せず、無限に世界に於ける一つの途上であり、宇宙と共に振動すること、没時間的な世界と共に振動することである。その目標は個々の能力や効果の向上ではない。真の教養は、我々の生活に意味を与え、過去を解釈し、恐れぬ心構へで未来に臨むやうに、我々を助けるものである。さういふ教養へ達する色々の道のうち、最も重要な道の一つは世界文学の研究である。過去が多くの民族の詩人や思想家の著作の中で我々に残した、思想や、経験や、象徴や、空想や、理想などの^{ほうだい}膨大な宝と徐々に親しむことである。

以上は、古典における、世界文学と教養との関係であるが、氏の所謂古典は狭義の文芸書類に限

ず、広く宗教的聖典や哲学書をも含めた人類が図書の形で残した最高の文化財を網羅したもので、人生主義的読書の対象としても適わしいものである。

教養読書から事象主義的読書・人生主義的読書への転化——教養読書から事象的な研究読書に移ることは一步の飛躍に過ぎない。深い研究には豊かな教養は不可欠である。教養読書が研究読書に転化する可能性が大であるということは単に偶然的のことではなく、むしろ計画的にすべての研究活動のためにはその準備段階として教養読書が要求されている程に密接な関係をもっていることができる。

教養読書の発展性はまた人生主義的読書に転化し易いものである。教養読書において絶対的真理にふれて靈感を得、主体性を忘れてその真理の探求に精進するといった読書を求道読書という。求道読書なるものが独立にあるのではない。求道生活における生活活動の一つの実現としての求道読書である。相対的な種々の真善美や正義人道ではない。それらのすべてをその光に照らして見るような根元的な一者に気がついて、それをはっきり見届けるための読書である。教養読書はその前で解消する。

教養読書への評価——教養読書の価値は二重に評価されている。その一は教養そのことを目的とする生活実践としての評価である。生活における教養の意義は高い。読書はある意味では教養を代表するものである。その二はあらゆる価値への途としての評価である。教養読書はすべてに通ずる最善の道であるということが出来る。唯一の最善とは言い得ないまでも最善のものの一ということでは出来る。生活実践として教養読書が高く評価されるのは、一には読書主体自らの此上なき満足であるからである。高い教養を身につけたことの悦びが他の悦びに比して大きいのはそれが言わば天爵^{てんしゃく}に属するからである。自らの悦びとしても永続不滅のものである上に、それが自らだけの悦びに終らないからである。そこにそれが高く評価される第二の理由がある。一人の教養の高まりは同時に他人の悦びでもあり力でもある。それは明らかに社会存立のための重要な維持力である。

中田邦造氏が石川県立図書館長時代における読書会運動として、「読書学級」や「青少年文庫」において特に力を尽したのは、此の教養読書であった。その意味でこの小論文においても、氏の意をくんでやや詳細に述べたつもりである。

3. 慰安読書

慰安読書の意味——慰安の語は多くの場合、慰安娯楽などと熟語した言葉として用いられているが、慰安読書は娯楽読書（情的感興読書）とは区別するだけの内容的相違をもつと考えられる。娯楽その他の感興を求める心境が著しく対外的であり、事柄自体の興味が中心であるに対して、慰安を求める心境が、対内的であり、何等かの方法で内心の慰安を得ることが問題である。慰安を求める心境には、極めて軽い程度のものから深刻なものまで無限の段階があるが、その全体を通じて先に何等かの精神的不安定即ち苦悩や心労や不満や重い心があることを意味している。従って、それらの精神的な衝撃・苦悩・困惑・心痛等の重苦しい不安定な心境に対する処置として慰安読書がある。

慰安向図書についても、図書の種類には必ずしも限定されず、それを読む心構えや態度によって慰安としての意義を見出し得ると考えられる。人によっては、随筆類や文芸作品等によって慰安を求めることも出来れば、伝記類、宗教関係の図書、あるいは自然科学書、哲学書や古典の類などに大いなる慰安を求めることの出来る人もある。

また読書の立場について言えば、たとえば個我的立場に固定していること自体が慰安を必要とする理由になることもあるので、読書に際して素直に著述に導かれて個我的立場を離れることによって直ちに慰安的効果を収めることも可能である。さらに言えば、宗教的図書を読んで慰安を見出すといったことは、慰安を見出すのではなく、慰安を必要とする立場を離れることによって慰安を受けたと同じ効果を徹底的に受けるということになるものである。

慰安読書から事象主義的読書・人生主義的読書への転化——長い病床にあるような人が慰安読書から文芸的な趣味的事象読書に深入りしてゆくといった例は少くない。また求道読書への転化の可能性も極めて強い。

4. 休養読書

休養読書の意味——読書に関して休養が問題になる場合が三つある。その一は読書を有効ならしめるために適当に休息すること。その二は精神活動の休養方法としての一種の読書法である。或は著述により或は読書によって生じた疲労を休めるために他の図書を読むといった場合である。その三は読書は、それが如何なる図書についてするにせよ、真に創造的な精神活動にとっては休養的意義をもつとする考えである。即ち読書活動は精神活動として常に休養的意義をもつとする考え方である。

旺盛なる創造的思索活動がとめどなく湧き起って、その創造の苦悩に堪え切れぬといった場合、これを沈静して休養をはかる方法は、創造活動の静かな他人の書いた図書を読むことより外はない。こうした考え方は激しい思想の持主であったニーチェの読書観において代表される。安部能成もその『読書論』において「私の場合に於いてあらゆる読書は、私の休養、従って私を私から解放するもの、私を他人の学問や魂の中に散歩させるもの——私がもはや真剣に取扱はないものに属する。読書は方に私を私の真剣さからくつろがせる。深く仕事をして居る時には、私の側に一冊の書物も見られない。」と述べている。

生涯的な休養読書——休養は一時的な生活の疲労もあれば、人生そのものについての疲労も問題になる。老人が「生き疲れる」といったこともある。十年一日の如く同じ仕事に働き続けていることは、そこに何等かの生命の更新作用が行われているのでなければ、如何にもあわれなことである。その仕事の外面的姿如何に拘らず、内からそれに生命付けるものがあるならば、如何様にも生氣ある生活を営むことができるであろうが、それなき生活には自らの疲労をもたらすことも避けがたいことであろう。

人生を退屈なきものに内容付けるものとしては、芸術にせよ学術にせよ道德にせよ、種々の文化的活動が営まれている。しかしこれらも終局において行詰りの生ずることを免れないものがある。それに対して宗教的なものは人生そのものの休養として意味をもつものである。人々はそ

れにふれることによって日常の生活努力に専心しながらも大きく休養をとることができる。宗教的安心立命は生命の絶対的休養法ということができよう。我々がもし深く宗教的意味をもって読書することを学ぶならば、その書は必らずしも特定の宗教書でなくとも、我々はその書を読むことによって宗教的休養を感じることができるのである。特に平素親しみ慣れた宗教的聖典などの読書に関心を寄せるものにおいては一段と興味深く生活の休養を見出すことができるであろう。

休養読書は極めて高次元の読書であるということができる。それは独立に意味あることではないが、生活活動と密接な関係に立ち、常に生命の基本秩序を重んじて、生命をその源泉において生かさんとするものである。一見最も消極的な姿をとりながら最も積極的な主張の上に立つ読書態度ということができるのである。

三．事象主義的読書（客観主義的読書）

客観主義的類型とは生活主体の関心が最初から客観的事象に向けられており、目標は客観的真理真実そのことにあるものである。客観主義的読書が最終的目的を達するためには、事の性質上、読書主体は孤立的に読書研究の主体的努力を重ねるばかりでなく、多数者による客観的調査研究に参加することが、よりよく目的を達する方法ともなり易いものである。客観主義的読書ということはそのまま科学的読書ということでないことはいうまでもないが、読書に際して、如何なる事象にもせよ、図書内容として表現されている事象自体の客観性を尊重する上においては何処までも科学的態度が要求されるわけであって、その要求が満足される程度によってその客観性は増減し、読書の価値が左右されることを免れないのである。

事象主義的読書（客観主義的読書）の類型は小類型として、1．実用読書、2．情報読書、3．調査読書、4．研究読書をあげることができる。

1．実用読書（効用発見的読書）

ここに言う実用読書とは、効用発見的ともいうべき、主体の生活のための実用的読書のことである。主体の実用目的とする読書であるから、最も主体的な読書のようなのであるが、客観的事象における効用的性質を発見することを基本条件とする故に、この読書現象が客観主義的読書類型に属するのである。

実用ということばの意味は多義的であるが、言葉の基本的意味は、生命にとって有用であるというにある。ジェームスにおける真理を「Useful to life」とする考え方は最も根本的な意味を含んでいる。

実用の語には広狭の二義があつて、広義では、真善美等の基本的な価値も心身の生活に役立つ限り娯楽も休養も実用的であるとも言えよう、また情報知識や調査知識なども実用価値は高いと言ひ得るであろう。しかしここでいう実用ということは狭義の意味であつて、文化的価値の高低は問わず、個人的にも社会的にもその日常生活の役に立てるという意味である。

狭義の実用価値即ち効用性は日常生活のあらゆる領域にわたって無限に近い種類に達している。その実例をあげれば、自然界に衣食の糧を見出し、住宅を建てる知識、火の効用を知る知識、家

庭や社会を営む知識、言葉を学び活用する知識、更に実用資材器物の生産知識、販売交換利用知識等々、所謂政治・経済・社会・生活等に関する種々の価値は^{ほうだい}膨大な実用価値の世界を構成している。こうした実用価値に属する実用知識は知識の類型としては常識に属するものであって、すべて学識の前知識となるものであるが、実用知識として生活科学の類のような実用科学的に秩序立てることも可能である。しかしこの場合生活環境を離れて学術化したものはもはや常識の領域には属しない。

実用読書というのはそうした狭義の実用価値即ち効果を取得することを目的とする読書現象であって、個人的生活の改善充実を目的として行われる読書である。すなわち、衣食住等所謂家事家政の問題、育児・衛生・保健等の問題、職業能力の改善教化の問題等個人生活家庭生活の充実向上をはかる上に役立つ利用知識のための読書が実用読書である。

実用向図書について考える場合、読む図書の信頼性如何が最も重要な条件となる。しかしながら図書内容が主体の必要とする目的に適合するかどうか、事象的には適合するにしても、その知識の取扱の正確さ信頼性如何は充分検討されねばならない。一応間に合う図書はあっても真に適合するものは無いとみななければならない。従って実用読書の仕方として二つの方法が見出される。その一は半ば有効なる知識を如何に補充して充分効果ある知識とするかであり、その二は不十分ながらも多少とも内容的に関係のある図書の幾冊かを取上げ一群の図書として実用にするという所謂図書群読書の方法である。

実用読書の情報・調査・研究読書への転化——実用読書は実用目的でする読書であるが、その場合、利用する知識の真理性真実性が問題になるためにその図書の内容に対して批判的になるのは当然であり、その知識の一時的な真実性に対して、それが如何に変化したかを問題にすれば、それは情報読書的发展方向をたどることとなり、その知識の真実性に不安があれば調査の必要を感じ、調査読書に転ずることとなり、読書目的が特に精密な知識利用にある場合は、若干冊から成る図書群を利用しながら実地について研究してみる必要が生じ、実用読書から研究読書へ転化することによって効果をあげることもなる。

2. 情報読書（情報蒐集的読書）

ここに言う情報読書とは、情報蒐集的ともいふべき事象の様相把握の資料を得る為の読書である。如何なる事象についてでも、その事情を客観的に眺めて、その真相を直感的に把握するための読書現象である。

情報という言葉は、これを広義に解すれば何等かの出来事に関して知らされる（inform される）知識の総称ともなる。それは概念的分析的知識などとはその性質を異にするが、それが現象的な事柄として伝えられる限り、一切の知識は情報の名で呼ばれるに適わしい知識ということができる。

また情報には狭義の意味もある。それは何等か基本的には既に知られていることについての断えず変化する動態や動勢についての知識ということである。自然現象についての気象情報とか、社会現象における海外事情とか、文化現象における学界情報・出版事情とかいうことは最も狭義

の情報知識である。

情報読書の意味——情報読書とは情報目的とする読書であって、何処までも目的が情報を得ることにあるから、他に真に正しい情報を得る途があれば、他の様々の方法と結合して行われれば、より効果的な場合が多い。

情報読書の問題は、図書に表現された事象界の動態については出来るだけ正確な知識を得なければならないから、一時的の断片的情報知識でなく持続的情報を得るようにし、一面的な情報に陥らないために、多方面の読書によって総合性を保つようにせねばならない。要するに情報読書は広く持続的に情報を蒐集するという型をとって行われねばならないことになる。

なお情報読書を効果あらしめるには、その事象に関する基本理解を確実にし、その全貌を捕捉する力を涵養するよう直接経験による直覚的理解を深めておくことである。

情報図書及び資料——情報読書に利用される図書及び資料の類は、極めて多種多様で、如何なる資料も見眼をもつものにとっては、様々な情報資源となるものである。そうした中であって専門的立場から作製された資料も多い。専門書には基本的理解を与えるような根本資料もあれば、その上に立ってその後の動勢を示すような資料もある。前者は纏った一部の図書であるに対して、後者が逐次刊行物であるといった形態をとることは最も普通に見られるところである。そうしたものが、専門的な情報提供の専門機関によって与えられるとか、情報を必要とする機能社会の機関誌の如くして探索的に編纂せられるとかいう場合は、概して信頼度の高いものとなる可能性が大である。そうしたものに対して情報提供が専門的でなく、どこまでも総合的一般的であることを特色とするものに一般の新聞雑誌等がある。それらは専門化していない故に専門的立場からは何かにつけて物足りないことが多いが、反対に専門化していないことによって一種の信頼性を加える面のあることも見出される。しかもそれが極めて大規模に運営されることによって、如何なる専門機関も及ばないほどの迅速さと正確さをもって基本情報を提供することが多い。

情報目的で構成された資料群——情報知識が遺憾なく蒐集されるためには、資料の構成が最大の問題となると共に、何よりも先にその構成原理が把握されねばならぬであろう。資料内容としても図書文書の類と現物資料の類の組合せ、写真・スライド・フィルム・音盤の類と文字を通しての資料などがその質的価値を考慮して数量的に構成されることが要求されるわけである。

情報読書から調査読書・研究読書への転化——情報読書において、情報資料が蒐集され、資料構成の原理が発見され、情報知識の対象そのものを知る工夫が次第に深まってくると、やがて調査読書に転化することにもなる。調査読書のみならず研究読書へ転化する可能性も大である。

3. 調査読書 (実態調査的読書)

ここにいう調査読書とは、実態調査的ともいうべき事象の実態把握を目指す読書態度によるものである。

調査という言葉は、学術的目的・社会的目的・個人生活的目的等に用いられ、その慣用は必ずしも一致しないが、自ら通ずるところはある。それらによって定義付ければ、調査とは何等かの客観的事象を対象として、秩序ある客観的方法によって、その実態を明かにし客観的知識を生

産する働並にそれによって生産された業績の総称である、ということが出来よう。即ち調査対象の実態を把握するため、それに対し観察・分析・測定・情報・蒐集その他必要な処置を講じ、秩序立てられたる方法によって実態知識を構成するものである。

調査にはその目的によって、事象の存否やその様態その数量を調べる静態調査と、情勢変化を捕捉するための動態調査とが区別せられる。その両面を総合して高次元の対象を調査することも行われる。

調査読書——各種調査において読書が適用される場合に三種の方法があると考えられる。その一は読書を手段方法としての調査である。即ち読書によって特定の調査の基本計画を設定したり、調査対象の限定や調査方法の研究をしたり、調査実施の先例を調査するなどのことを行い、また具体的に一定の基本資料を作製して、それによって多数者の回答を求めるような世論調査のごときがそれである。その二は読書現象そのことについての調査である。その三は調査者が調査対象に関係する資料を探索採集し、その内から必要内容を採集整理することによってする文献的調査である。ここに調査読書というのは、そうした文献的調査を目的とする読書を意味するものである。

読書調査といってもその意味内容を異にするいくつかの方法が区別される。(イ)ある調査対象に対する調査活動の中心を読書的方法に選び、あらゆる角度から図書資料によって情報知識を採集し、それに調査的整理を加えて、その対象の実態把握の目的を達しようとするのは最も代表的な一法である。(ロ)それに対して調査計画や調査準備のためには読書による方法を採用するが、具体的調査は全然即物的に発掘的方法や実験的方法や観察的方法や聴取的方法等によるものがある。(ハ)多くの場合、その調査対象の性質と調査目的如何によって両者が適当に組合わされて行われるのが実情である。

調査図書資料——基本的調査図書と専門的調査報告——調査資料としての図書はいかにえらばるべきかは調査目的によって一定すべきではないが、いかなる事象にもせよ、完全に孤立しているものでない限り、他の近接現象と不可分の関係にあるわけで、その意味で、関係のある多方面の図書資料は特に基本資料として重視せられるわけである。例えば社会調査関係における人口調査のごときがそれである。また一つの調査結果は何等かの形にて図書化され資料化される故に、あらゆる調査結果の報告書の類は関係事象の調査にとって極めて有力な資料であるといえることができる。

各種の専門的な調査結果の様式はそれぞれの事象の性質に即して一種でないことはいうまでもないが、何等かの形で統計的な、或は集計的な、或は比率的な、或は採集的な表現形式をとったものが多いことは、調査関係図書資料界の一特色でもあろう。

4. 研究読書（学術的研究読書）

研究読書とは、学術研究的ともいうべき、事象の真実探究の読書態度で、総合的全人格的態度の読書といえることができる。即ち客観的对象に関してその真理認識を目的とする読書であって、それはいかなる情動的現状知識にも拘束されず、またいかなる調査的実態知識にも執せず、しか

もそれらの諸知識をも含めて、その間にひそむ純粹に客觀的な普遍妥当的な永久的真理を探求し、確認することを目的とする読書である。

研究とは、何事についても、その個々の現象を一般的意味において、一時的なものを永久的な意味において把握しながら、しかもその理解の現状を過去として乗り越え、常に新たなる意味を見出してゆく努力ということができよう。科学的・技術的領域においても、文学・宗教の領域においても、研究の行われているところにおいては、常にその領域についての理解の現在の状態に反省批判が加えられ、新たなるものが生れている。歴史の如き領域においても、その研究的努力の前においては、すべての時代が常にその現在において反省せられ、絶えず新しい意味において理解せられている。研究とはあらゆる事象に関しての不断の革新的努力であるということができよう。しかし、その努力は何処までも、事象自体の客觀性を根拠とし、何処までもそれに迫る努力である点において、それは事象主義的な読書の類型に属すると見ることができる。

学術研究に読書的方法が必要なる理由として次の五つの理由があげられている。第一の理由——研究が常に厳密なる方法と綿密なる態度を必須条件とするならば、それが不断に乗り越えねばならぬ現状とは何であるかを明確にしなければならない。その現状を確実に精密に且つ総合的に示すものとして図書資料を除いて他にこれを見出すことはできないであろう。これが、読書的方法が学術研究上不可欠の方法と見なされる理由の一つである。第二の理由——現状を乗り越えるということは、その事象研究の内面的な必然性をもってするのでなければ無意味であろう。そしてその内面的必然性に従うということは、その研究の歴史を辿り、研究が現状に到着した経過を明らかにすることによってのみ可能であるということが出来る。それこそ読書的方法が担当するにふさわしく、それを離れて不可能である。これが読書的方法の研究的意義をもつ第二の理由である。第三の理由——新しい研究の過程として、またその着眼点として、何が避けられねばならぬか、それに代るものは何であるかを発見しなければならぬ。その為には不断にその事象界研究の原理としての基本精神を明らかにしていなくてはならないであろう。そうした原理を自覚的にするためには、広く関係学術の世界における古典を読むことによって、人類社会にそうした学術をもたらした先覚の心境を学ぶにまさることはないであろう。これが読書方法を研究の世界において必須の方法と見る第三の理由である。第四の理由——いかなる研究にもせよ、それが深まれば深まるだけ、他の研究領域と広く関連を生ずることは当然であり、しかもその実、深まれば深まるだけ孤立化する傾向をもつことは免れない。研究活動のもつこうした困難な運命を打開する途は諸研究の協力にあるべきであろうが、その協力を実現する現実の方法は読書にありというべきである。これが研究方法として読書を不可欠のものとみる第四の理由である。第五の理由——一般に学術的研究のためには、関係資料調査によって発見せられたる網羅的な図書資料が極めて大なる力となるものである。たとい実際に立入って読むものは百千冊の中の一冊二冊に過ぎないにしても、資料の全貌觀察によって、自己の研究の諸研究の中における地位を知ることによって得るところだけでも、その意義は深い。これが研究における読書の意義を証明する第五の理由である。

研究向図書——研究的読書現象の客観的事情に即して必要と認められるものは、(イ)研究の現状把握のために役立つ図書類で、概論的に誘導的に書かれたものである。(ロ)研究の経過・動向を示すものとしての歴史書の類。(ハ)原理的な研究書。理論的に原理的なものとしての古典のように、その研究の開拓力としての原理的精神と見られるもの。またその近接科学の古典を読むことも極めて効果的な基本読書といえることができる。(ニ)また一つの研究の大成するためには、その研究が小さく自らの枠にとじこもらないために、他の諸研究との協力関係を保ち、関連的諸研究に通ずる基礎研究や共通資料が重視されねばならない。

研究主体そのものの英知性⁽¹⁰⁾——専門的研究が単なる特殊専門の研究に墮せず、最も原理的なものの専門的研究として取りあげられるためには、研究主体そのものが、自己を超脱して何処までも純粹に英知性を発動するものでなければならない。さすればその研究は2点において大成の可能性を示す。一つには私の影をひそめることによって研究の純粹性を保つことができ、他はかくて生じた英知性の自覚によって所謂個我に見出されない大能が発動するからである。それには研究そのことへの精進の外に、人間としての基礎教養を深めることに努め、基本的に英知性の自覚に達する努力がなされなくてはならない。

三、人生主義的読書

人生主義的読書類型とは、読書によって新しい生命内容を摂取することが直ちに生活主体そのものの成長となり、成長した主体はその新しい立場で新しい読書を欲求するといった過程を辿って、読書生活を展開させて行くような態度をもってする読書である。そこには常に基本目標としてよき人生があることが認められるので、これを人生主義的読書類型と呼ぶのである。この類型の読書の特色は、それがたとい、一部の文化内容に限定された読書であっても、そこに全人生との深いつながりを見出していることにあるのであって、人生から切り離された読書はあり得ないとする。また何か読むということは主体がそれに溶けこみ著述主体の立場に立つことであるから、一時的にもせよ著述主体と共に働くということは何等かの形でその影響を後まで受け続けることになるわけで、そうした経験を重ね続ける読書生活の経験は他のいかなる生活経験にも増して、その生活を特色付けることになるものと見られるのである。

人生主義的読書の類型は小類型として、1. 学問的読書（主知的な学問的読書）、2. 修養読書（主意的な修養的読書）、3. 鑑賞読書（主情的な鑑賞的読書）、4. 求道読書（全人格的な求道的読書）をあげることが出来る。

1. 学問的読書（主知的な学問的読書）

学習的読書と学問的読書について

学習——学習とは、これを最も広義に見れば、生活経験の一切は学習である。更に厳密なる意味において学習を考えるならば、生活活動の価値を判断して、より高い価値を選んで、それを生活に実現しようとする努力的働と見ることができる。このような意味において理解せられる学習は、最も判然とした自己教育的働としての意味をもつものである。

学習活動にはまたいくつかの形態が考えられる。被指導学習・自発的学習・自覚的学習などである。被指導学習において、その指導性が徹底することによって、自学性が徹底し、その指導性が工作の跡形も現われない程に徹底した場合に被指導者は完全に自発的に学習することになる。かくして現われるのが自発的学習であり、そうした自発的学習はやがて自覚的学習として学術的研究のような何処までも高い学習形態をも実現してゆくものである。

自覚的学習は自発的学習の上に立って発現するものであるが、それは又自覚的に被強要学習をなし、或は被指導学習をすることもあるわけであるから総合的な学習形態と見ることができる。

被強要的学習形態は、無意識に生活環境への適応を余儀なくされてする学習であって、広義の生活経験そのものを学習と見る場合のように、環境力に服従して行く生活において現われるものである。

学問的——学問的ということは単に学習的というだけの意味ではなく、学術研究的といった客観的事象に対する根元的関心の自覚性をも含めての学習的生活態度を意味するのである。それは意識的能動的に働く生活態度である故に、そこに含まれる学習性も自ら自発性や自覚性を濃厚にする。古来学問的生活態度には立志が必要条件とされたのは理由なきことではない。

学問的態度とは、眼前の特殊事象に対する現在の学習性をもつというにとどまらず、過去を省み将来に備えて常に現実の生活経験の全秩序をもってする高次的な学習的態度であるということができると共に、又それは単なる個我的内面的問題として終らず、社会的或は世界的関連においてする英知的立場の関心であるということができる。従って学問的であるということは常に英知的であることへの努力を含み、時代性・個我性を超脱して常に世界的であり永遠的であることを期待するものである。即ち学問的ということは人生的に秩序付けられた多数の学習的態度から成る高度の生活態度であるといつてよからう。

学習的読書——学習読書とは一言にすれば学習目的をもってする読書ということに外ならない。学習がすでにその発展段階によって幾つかの形態があったように、学習的読書もまた(1)被強要的学習読書、(2)被指導的学習読書、(3)自発的学習読書、(4)自覚的学習読書（学術的学習読書）にわけて考えることができる。

(1) 被強要的学習読書——被強要的学習とは、一箇の個我的主体が他の個我的なる意志によって強要されてする学習ではなく、主体にとって如何ともなしがたい外界的存在としての環境条件によって否応なしに適応させられることによってする経験的学習である。また乳幼児がその環境においてする如く、或は個我的主体がその自然や社会環境に対してする如く、選択の余地もなく一義的に強要されてする環境適応の学習経験をいうのである。

さて読書現象の領域においては、文化社会の生活者としての、それに準ずる被強要的学習読書はあり得る。それはその国語文をその社会のリテラシー（literacy 読み書き能力のその社会としての最低基準）に達するまでは読みとる能力をもつことを事実上強要されるわけである。また具体的に義務教育における教科書読書の如きは、教育者の努力によって如何にその強要性を緩和するにしてもその学習から全然強要性を無くすることはできないであろう。

(2) 被指導的学習読者——被指導的学習読書とは、指導を受けながらにする学習読書であって、それは多くは教育的環境において行われる学習読書である。被指導的学習読書は、自発的学習読書を可能ならしめるための指導を受けることによって、被強要学習読書の被強要性を緩和しながら、学習読書の効果を顕著にするものである。

(3) 自発的学習読書——自発的学習読書とは、生活主体自らの発動によってする学習読書である。学習読書である以上、主体が学びとるべき何等の価値が主体に対して客観的に存立するわけで、それをこなして主体の身につけるためには、主体は自らを空しくして価値の秩序を受容しなければならないが、そうした自己否定をも自発的にするところに自発的学習の意味がある。学習読書においてはその自己否定的能動性が純粹になればなるだけ、学習目的は徹底するわけであって、学習読書の代表的な形態は自発的学習読書にあるといえることができる。

(4) 自覚的学習読書——自覚的学習読書とは自発的学習読書が自覚的に発現する場合をいうのであって、同じ自発的学習読書にしてもそれが自覚的になっているかいないかは、その効果の上に著しい相違を生ずるものである。そうした自覚的学習読書においては、必要に応じて、意識的に被強要的学習読書・被指導的学習読書・自発的学習読書などのいかなる形態をも自由にとることの出来る、即ち諸立場の総合的立場をとることが出来るのである。そしてその自覚的学習において最も特色ある高度のものは学問的学習読書（学問的読書）である。

学問的読書——学習読書はいくつかの形態をもつが、被強要的読書はその最初に現われるものであり、被指導的読書はそれに続く。自発的読書が発現するにいたってはじめて学習読書の独立性が認められる。しかしそれが真に独立の立場を発見するのは自覚的形態の読書が行われるにいたった時であって、そこに学問的読書の立場が確立される一つの根拠があるといえることができる。かくて自覚的読書の形態が充分発現する段階においては、すべての形態の学習読書が自覚的となり統一的に秩序立てられて発現することになるものである。そこに学問的読書の統一的性格が証明せられることになる。

2. 修養読書（主意的な修養的読書）

修養の意味——広義と狭義

広義の修養——修養とは何等かの意味で能力を鍛練することによってその性能を高めることと理解される。鍛練ということは例えば意志や行動にその内面的原理として規範的なものを見出し、それに従って働くことに慣らされることである。原理的なものの規範性とは、例えば意志活動においてその質を純一にするとか、善意志の強靱性を増すとか、意志的諸能力の発動に秩序立てを増すとか、人格的活動の理想性を自覚的にするとかいったことである。

狭義の修養(a)——単に意志の訓練とといっただけのことでなく、そこでは高い生活秩序を前提としての生命活動の訓練が問題となる。個性ある人間として意志し言行する場合、そこに自ら個性的な生活秩序が宿されているような場合に、そういう生活主体は修養のできた人間と認められる。そのような修養は全人格的な生活経験の累積において自ら実現せられることであるが、その場合に高い生活原理を発見したもの、例えば宗教的な信仰とか、政治的信念とか、芸道的信念と

かをもつものなどにあつては、自らそうした特別の風格をもった生活が展開せられ、従つて又そうした個性をもった修養が成就される。

狭義の修養(b)——もっと狭義に道徳的に理解されている意味もある。それは高い道徳原理を発見し、それを身につけて意志し言行しようとする精進努力として現われる。即ち道徳的自覚の上に立つて、その価値を中心としての修養をいうのである。判然とした道徳原理の自覚の上に立つて、他の利害得失便宜の有無等のことは一先ずこれを離れ、純粹に善悪を判断の基準として生活の内省をして行く努力であり、善を価値の最高基準として、それを実現するための生活努力が自覚的な道徳的修養である。

修養の根本義——以上の諸義の修養は窮極において結合すると考えられる。即ち個我的なるものの執着やその凝固を解いて素直に英知的生命の自由活动が実現されるところに修養の根本義はあると言ひ得よう。修養の根本義は生活活動の全人格的秩序立てへの修養になくなくてはならぬが、そのための意識的建設の努力は何としても道徳的な修養が中心的な役割を演じなくてはならないわけである。

修養読書——修養を目的とする読書は、終局においては、基本的に修養が目的とするところの生活活動の自主性を実現するにあるといふことができる。読書が修養に役立つというとき、(イ)読書が意志の鍛練として、修養に直接役立つという形式的な面の修養性と、(ロ)読書内容如何によつて効果をあげる場合と、(ハ)修養的生活の実践と修養読書とがマッチして効果をあげる場合とがある。

(イ) 形式的な面の修養性——一日の中に長時間読書活動を持続するために肉体的に静止状態を持続するということ、或は短時間宛にもせよ日々そうした状態を反復継続することは、それ自体が大きな修養的效果を伴うものである。それ以上に重要な意味は、そうした読書時間中、精神的に常に自己を没して、著述内容に専心追体験しているということである。即ち、何らかの内容を追体験するために、個我への執着を完全に離れ切る時間を自覚的に、しかも持続的に反復継続的にもつということは、修養的意義の極めて大なることを証するものである。

(ロ) 内容的面の修養性——読書の効果は言うまでもなく、より多く読書内容如何によるわけである。良識をもって選択せられた図書が修養読書に役立つことは言うまでもない。例えば修養そのことについて明確な自覚を与え修養心を鞭撻促進するような図書が直接修養読書の対象として役立つことは当然であるが、更にすぐれた人物の伝記類によつてその広汎な修養実践の跡を辿るということは読書主体の修養上まことに大なる影響のあるものであつて、昔から伝記類によつて、発奮立志の実をあげた人々の例は枚挙に遑がないほど多いことである。

(ハ) 修養的生活の実践と修養読書——精神の修業は何としても具体的内容をもった修養的生活の実践において最もよく実現される。特に良き方針と計画をもつてする修養の実践が一層効果的なことは明らかである。一方に修養読書をしながら、他方に実践的に修養をすることは最も効果的方法であるといふべきである。

修養読書と人格的徳能の世界——修養読書は如何なる効果をもたらし得るか。一般的には個々

人のその場その場の読書効果と見がちであるが、読書現象の客観的性能を明らかにすれば、主体にとっての客観的価値として、いくつかの類型を見出すことができる。修養読書におけるそうした客観的価値はそれを概括して人格的な徳能ということができる。そしてその人格的徳能には、(1)学徳(2)道徳(3)芸徳(4)信徳などの類型を考えることができる。

(1)学徳——学徳とは学習的修養即ち修学的訓練によって涵養される学問的徳能であって、それはやがて広い学術の世界に自由に通達し得る理解力であると共に容易に新しい研究を推進し得る開拓力である。

(2)道徳——実践的修養即ち修業的訓練によって涵養される生活実践の徳であって、それはあらゆる生命活動の領域において価値高き自由を実現する動力である。所謂道徳界の諸徳はその一々が生活実践の原理である。

(3)芸道——生命の実践活動の中で、芸道技術の修練的实践において発揮される徳能である。芸道の乃至技術的修養鍛練によって習熟した能力は、偉大な自由活動の天地を建設した技芸的価値を生産する。芸徳とはかかる技芸的価値の理解発見鑑賞生産等の諸徳を意味する。

(4)信徳——信徳とは信生活において修道的実践において実現される徳である。何等かの人生観宇宙観の上に立って、生命の実現としての世界について基本理解をもった後の生活は、そこに信ある人によりのみ見出される徳を生ずるにいたる。それが信徳である。信徳に生きる生活はもはや個我的世界や個社会に執しての生活でなく、英知的に高められ、唯一的に秩序付けられた世界に足場しての生活である。それと共にそこにおいては、又絶対的に受動的な立場に立って万事万物をそのままに観賞する徳能を発することにもなる。同じく学徳と言ひ、道徳・芸徳などと呼ばれるものも、それがもう一つ深く信徳の隈なき光に照されている場合には、自ら次元を異にする徳相をもつものと見直されるにいたるものである。

3. 鑑賞読書（主情的な鑑賞的読書）

鑑賞の意味——鑑賞とは、美を中心とする価値の情意的享受を意味する。即ち美的価値を主体に実現し味解する働である。それは常に一種の快感を伴う故に主観的な享楽と同視されがちであるが、鑑賞は一面に普遍妥当的価値の把握を条件としている故に単に主観的な働に終るものではない。その主体的享受が発展して能動性を加えれば、制作力・創作力・構想力として美を客観的に実現することにもなる。

鑑識眼——常識的に鑑賞と言えば、その範囲は雑多であり、自然の花や果実やその色や形や味の鑑賞、風景の鑑賞、美術や工芸や音楽の観賞、文学詩歌の観賞はもとより、人情や世情や道義や人生観等の鑑賞も問題になる。そしてそのような鑑賞をする能力を鑑賞力とか鑑賞眼とかと呼び、特にそれらの普遍妥当的価値に対する判断力を鑑識力とか鑑識眼などとも言っている。

鑑賞読書

図書内容の鑑賞とは——図書内容の鑑賞とは、著述主体の表現を通して、その主体が把握したその対象界が鑑賞されることであるべきである。鑑賞は表現を直接の対象とすべきは当然であるとしても、表現されたものは有限であり表現せられるべきものは無限である。そしてその無限な

るものは有限なるものに宿されているのである。表現の中に宿されたるものを鑑賞しようとするれば表現の対象の世界が鑑賞の対象とならねばならない。即ち読書主体は著述主体の立場に立って、書かれたものを通して書かれようとしたものを探らねばならない。そのためにはその対象界を把握して、それを表現すべく発動した著述主体としての心境を探ることが重視される。

もしそれが歴史に関する著述であるならば、同一史実について書かれた立場のちがった二書以上を対比することによって歴史的真實の所在を探ることができる。

文学においては普遍妥当なる文学的真實が一著者の一回的著作において読みとらねばならぬ故に、その図書において著述主体の心境を鑑賞することは特に重要性をもつわけである。

芸道における普遍妥当的価値の観賞については、それについて書かれた^{しんびょう}信憑に値する図書があるとは限らない。そうした図書がないからと言ってその芸道の真理真實がないということではない。明かに口伝によって、或は行動事実において実証されているものもある。たとい諸芸道に関してすぐれた図書が書かれているにしても、その真理真實は客觀的事実が先に建設されていて、著述はその真實を表現したものに過ぎない。

鑑賞読書の真義と読文読事読心作用

鑑賞性を含んでする読書においては、読文作用によって先ず理解すべき対象そのものの発見把握がなされねばならない。その上に立って対象そのものの内容理解が客觀的になされねばならない。その二重の努力において読書主体は自己超越的努力を行わねばならない。かくて新しく見出されたる主体自身の立場において把握理解せられたる対象内容を感興的^{がんみ}に玩味するところに鑑賞読書の真義はあるといえることができる。

文学の鑑賞読書についてこれを見るに、その鑑賞対象は読書対象以外には何処にも見出されない。表現に宿されたる文学的真實そのものが対象である。文学読書においては、読文作用において先ずその対象が発見されねばならない。その対象たる文学的真實の正体を捉え、その内容を明かにするのは読事作用である。その事象秩序において著述主体の動向を捉え、その心境を味うものは読心作用である。その心境が如何にその事象を創造的に発見し、如何にその姿をその事象秩序に実現しているか、その事象秩序が如何に文章に表現されているかが十分に吟味されなくてはならない。そのことによって読書主体は自己を忘れ著述主体に導かれて新しい境地に立つことができる。その境地を自己の境地として表現されたる事象秩序を感興的に玩味する。このような鑑賞的努力があらゆる部分において行われ又その全体について行われねばならない。こうした努力と感興とが二元的に現われずに、同時的に達成され、読文的読事的読心的努力の意識さえ生ずることなく読み進めることはよくよく熟練したる読書主体によってのみ可能である。

4. 求道読書（全人格的な求道読書）

求道の意味

道とは——求道における道の意味するところは、生の基本的拠りどころと見ることができよう。それは個我的な生命がそれとしては終に如何ともすることのできない苦悩や、解決のしようもない困難を、その個我的なるものから脱却して鍛えられたる英知的生命に帰し生命の真義に徹する

ことによって解決することができるとするのである。そこには単に普遍的生命に帰するというだけでなく個性的生命の満足を見出すということが条件として含まれねばならないわけである。

求道とは——求道の根本的意味は、宗教的な求信の問題に帰するであろうが、広義には、処世的求道・道徳的求道・芸道的求道・学道的求道など夫々の窮極的到達点を探る意味で求道的と言えよう。宗教的な意味で求道とは非常に広い意味をもっている。即ち所謂入信以前の迷悟の境にさまよっている煩悶時代に、信の根拠を求めて進むといったことから、信生活に入ってその生活内容を楽しんでいる状態を含めて、悟後の修養期における出路の道を求める生活にいたるまでを求道の活動として見ることもできるのである。

求道読書——求道読書は求道を目的とする読書活動であるが、問題は、真剣に道を求める読書主体の要求に適應する読書が行われることが大切である。その求道読書には、(イ)、求めらるべき道について書いた図書を求道の心をもって読む場合と、(ロ)、実践的に求道目的を達しようとするときに、その実践を補い助ける意味において求道関係の読書をする場合とがある。

求道読書において過去と現在とはいかに考えるべきであるか。求道の語は一見古めかしい語感をもっているが、問題としては最古から最新の問題を含んでいる。しかして求道の実際は常に新たな問題を含んでいる今日現在の生命の基本的欲求を満足させることが条件となっている。図書に表現されたものは過去に属するとも考えられるが、しかしそれは、過去において何らかの求道目的の達成に役立ったという実績をもつ現在知と見られるのである。昨年結実した果樹はもはや今年結実し得ない、という推定は成立たない。むしろ昨年結実した故に今年も結実するであろうという期待がかけられるのである。

求道読書の初期にあつては到達点の予想は見出されない。唯到達への可能性の信頼が現実となるかどうかの問題である。信頼感が現実となった時には到達点への予想はできなくとも求道読書は成立する。そしてその信頼感は自我の独立性についての不安定の確認と現実に信頼する生活主体がその道に同行するということによって堅持される。先覚的同行者は現実の求道活動にとって重要な条件であるが、求道読書においても極めて重要な条件となる。従つてこの段階においては高い真理に直接するというよりも、高い真理を求めて歩む読書主体の求道活動の表現にふれるということの方が偉大な力となるものである。バイブルを直接読むよりも現代に優れた人物の求道告白を読むことの方が求道読書として効果的ということになるものである。

それは求道の精神的実践である。求道の一步一步は楽道の一步一步である。求道読書において適切なる図書にふれ適切なる求道活動が行われるならば、その一步一步は加速度的に發展する可能性が生ずる。特に、現実に、すぐれた先覚的同行と邂逅するにおいては、その求道は如何に困難な道を辿るにしても、その内面に淨い樂が充ち溢れることになる。

求道読書の読書類型は、また小類型として宗教的求道読書・道徳的社会的求道読書・芸道的求道読書・学問的求道読書等をあげて、その特色を考えてみる事が出来る。

(1) 宗教的求道読書

宗教的求道読書は求道読書の基本的な姿である。しかしそこには多くの問題が残されている。

宗教的基本問題は読書によって解決されるかどうかということである。読書を完全読書として理解しない人々は、読書が宗教の本質にふれないことを取上げ、或は言詮不及といい、神性や仏性は知不知に拘らぬ問題としている。それは如何にも尤もなことである。しかしそうした見方自体が読書の本質にふれ得ていないことを知らねばならない。読書の実相は文字を通ずるにせよ文字に終始するものではない。一言一句にもその背後に生命が宿っている。それを前方に捉えようとすれば影を追うにすぎないが、それを背後に直覚すれば直ちに源泉にふれるわけである。宗教的な求道目的を不完全読書によって達することは最初から不可能である。しかし一度宗教的事象を直覚したものが、それを背後に含めて読書すれば読書が生きて来るは当然であり、その確信なしにはあらゆる宗教の聖典類などもおよそ愚かしき存在と言わねばならない。宗教書類は宗教的体験を文字に表現したものである。それは既に一度結実した果樹の如く、その道を辿れば結果疑なしとされる知識である。それを自らの体験として読みとり、個性的な結実を見ることが宗教読書の業績である。

(2) 道徳的社会的求道読書

道徳法は人倫の問題として古今に通じ民族や社会の別を越えた価値をもっている。それでいて社会毎に歴史的風俗や習慣に縛られた半面を持っているために現実生活においては常に紛糾を生じがちである。同一社会においても新旧思想の持主はともすれば道徳観を異にする。そうした中であって新しい標準によって是認される行動をもって結局は新旧の両者を納得させるような価値ある生活態度を求めるところに社会的道徳的求道の問題がある。歴史を離れて道徳はないが、現在を忘れても道徳はない。自己を離れて道徳はないが、他を忘れても道徳はない。過去と現在との結合において将来を建設し、自己と他己との間に新しい社会性を創造するところに新鮮なる道徳的求道の問題はあるといえることができる。

(3) 芸道的求道読書

芸道的求道読書とは芸道的真理真実を求めての読書である。そうした読書実践の姿を図書に求めることは、恰も音譜を演奏することによって一回一回異なる価値を実現し得る如く、新しい価値を創作することである。

芸道に関して最も独特の領域をなしているものは文学である。文学はそれ自体が芸術であり、それ自体の中に価値創作の技術を含んでいる。文学読書は最も顕著に鑑賞的であると見られるが、同時に極めて高く求道的にも評価される。それは芸道的にも求道的であるが、道義的にも時には宗教的にさえも求道読書の対象として値するものである。

芸における道が読書において果して求め得られるかは常に問題とされ、時に否定される。しかしそれは宗教的求道におけると同様に、求道における完全読書型を問題にすれば当然肯定される。即ち芸道的求道読書とは芸道における道の何ものなるかについて単に概念的にのみ問題にしているのではなく、実質的に道の欠乏に悩み直覚的に道の実質を求める立場において読書するのであるならば、要を得た読書によって道を体得し得ることは十分に期待されるものである。

(4) 学問的求道読書

学問的求道読書とは、特殊専門学においてにせよ、総合的な学問的態度においてにせよ、常に英知の聲に聴きながら純粹に学道を歩む立場においてする読書である。一々の特殊学にはそれとしての内面的原理が見出されるが、学問全体を通じてそこに学問的原理が見出される。学問的求道とはそうした原理をしってする生活態度である。学問の道は何処までも一定原理に基いて純粹に研究的であることを必須条件とする。研究はそのようにして学界自体の現在の到達点から一歩踏み出すことを意味する。

初学者が学界の現在の到達点にまで追従することは学習である。学習もまた研究的であることは言うまでもないことであって、学習の進歩の勢をもって現在の到達点を突破するというのが研究の実情である。学問的求道読書とはすべての読書に学習的研究的態度をもってすることを意味する。その読書によって習得するところは単に他人の学習研究の跡を学びおぼえるといったことでなく、他の指導案内を受けながらもすべてを自ら理性を通して学問的に判断して受取り、その結論については常に反省的であり批判的であることを意味する。こうした読書態度が求道的であると見られる所以は、常に客観的な真理真実を追求しながら、それを理解把握することを素直に自己の現在の立場においてし、学習し得るに従って自己の立場を成長発達させはするが、特に何学に専門的に研究を進めようとはせず、何処までも生活の立場において研究的精神に生きようとして読書をしている故である。そうした読書の一々の場合を見れば鑑賞的読書に通ずる一面もあるが、鑑賞読書が、情意的理解とか直覺的味解を深めることを主とするに対して学問的求道読書においては何処までも理性的把握とか英知的納得といったことを要求する点において判然と異なる領域を占めているということができるのである。

（5）読書求道

読書によって宗教的・道徳的・芸道的・学問的等の求道目的を達しようとするとは別に、読書そのことにおいて生命の求道的欲求を満足させようとする態度である。既に長い人生において広く各種の実践体験を遂げ、如何なる面の読書ももはや概念の遊戯ではなくなった立場において深く読書において取得する自信をもった主体が宗教的と言わず道徳的と言わず、又芸道的・学問的と言わず、広く人生内容の全般にわたって求道的に専ら読書する生活態度に読書求道の姿を見るのである。

書かれたものは経験されたことであり、一度経験されたものは最も大きく再現される可能性のあること、他者によって他の姿をとった経験は自己において自の姿をとるものであることを確認してかかる時、既に大なる実践の経験をもったものが更に進んで読書求道の生活に精進するということは最もすぐれた生活の展開が期待せられるといつてよからう。

（注）

- （1）『図書館と出版文化』弥吉光長先生喜寿記念論文集、日本古書通信社、昭和52年9月9日、p. 158
- （2）同上、p. 158
- （3）梶井重雄編『個人別図書館論選集 中田邦造』日本図書館協会、1980年8月21日

- (4) 氏は『読書現象論』において「読書現象の分析的理解」の章をあげ、この章の第一節を「読書現象の構造」とし、これを更に、

- 一、読書現象の真相把握の途
- 二、単位読書現象成立の諸要件

にわけ、二を更に

1. 単位現象を構成する八要因
2. 八要因の概貌

とした。その八要因の要約が次にかかげるものである。以下ゴチック体は筆者。

- (5) 『日本国語大辞典』〔縮刷版〕(小学館)には「全身全霊」とあるが、ここは氏の表現に従った。
- (6) 諸条件とは、時・処・位といった広義の環境的条件、また自然的環境・社会的環境・歴史的環境などの条件をもいう。
- (7) 氏はまた『読書現象論』において「読書現象の実相」の章を設けて、それを次の節に分ける。

- 第一節、読書現象の実相探求
- 第二節、主体主義的読書の実相
- 第三節、事象主義的読書の実相
- 第四節、人生主義的読書の実相

以下その要点をあげて説明を試みる。

- (8) 氏は、読書力すなわち「読みの深さ」について、(1) 読文的読書、(2) 読事的読書、(3) 読心的読書の三段階にわけて詳論している。(『宗教読書について』(「土」金光図書館7号～20号)並びに『読書現象論』)。この読文・読事・読心読書は氏の『読書学』に於ける重要なモメントをなすもので、その『読書現象論』中に

一図書を手にして、そこに見出し得る価値は、少くとも三種類ある。その一は文章的价值であり、その二は知識であり、その三は人格的价值である。一を知るものは読文読書であり、二を知るものは読事読書であり、三を知るものは読心読書である。もとより読書に三種の別があるわけではないが、着眼の焦点の置きどころによってその別が生ずるのである。(読書現象の八要因中の「読書作用」参照)。

また『宗教読書について』の中で

読書において真に著者を読むことはその心境を読むことであり、著者においてその心境を読むことは、読書において自己自身を読むことに外ならないのである。すべての読書においてこうした意味において著者の心境を読み自己自身を読むといったことは読書の枢要点であろう。(同書、宗教教育と読書(下))

この読文・読事・読心の思想は、本居宣長の思想的影響をうけている。本居の『うひ山ふみ』に「まづ大かた人は、言と事と心と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかしこき人は、いふ言のさまも、なす事のさまも、それに応じてかしこく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに応じてつたなきもの也。……」とあって、この言・事・心が中田邦造の読書学では、文・事・心となり、読文・読事・読心となって哲学的体系を与えられているのである。

- (9) ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳「世界文学をどう読むか」
- (10) 中田邦造は、その『読書学』において、著者(著者の立つ人格的立場)においても、読者(読書主体として立つ動因としての生活主体)においても、三つの立場を区別することが出来るという。
1. 生物心理的個我としての自我の立場
 2. 社会的職域的自我の立場
 3. 形而上的超個人的ともいうべき英知的自我の立場
- (以上、『読書現象』における「読書主体」より)
1. 個人的な立場
 2. 社会的自我の立場
 3. 英和的な自我の立場

（以上、『宗教読書について』における「7．読書現象における宗教性」より）

我々の生活は肉体的に個人的意欲を中心とした生活を営む一面をもっている。従って個人的幸福や心理的満足を求めてやまない。例えば衣食住の問題に関し、健康の問題に関し、各種の技術能力の習得に関し、趣味や娯楽の問題に関して、それらの知識を求めて、我々の生活を充実向上させようとする努力には充分の根拠がある。（以上個我的立場）。

我々は生物心理的個我的立場に慣らされているが、その実、現実の生活においては個我是社会的関係において、その一成員としての生活者たるにすぎない。主観的には個我が先に在って社会関係に入るように感じられるが、それは個我的母胎であるところの大社会の中において、特殊な小社会関係に入るということか、或は大社会そのものにおいて特殊な地歩を占めて行くことを意味することであろう。いずれにしても、自己の内に社会的生命を発見したものは、その立場において個我的欲求を顧みぬ程度に高い生命の意欲を自覚するものである。（以上社会的自我の立場）

「英和とは万人の心奥に通ずる純粋な理性や情意の基本的働きであって、例えば厳密な学術知識を探求し、あるいはこれを理解することのできる理性とか、国境を越えて働く道義心や、これに共鳴し得る道理の感覚とか、真実に美しいものを創作し又は真に美しい人情を美しいと感じ得る感受性はすべて英和に属するものということができよう、」と氏は言い、また「英知に欠ければ社会的正義ということも個人の一面的考え方にすぎないこともあり、国家的利己心に執るといった過誤もなしとしない。英的的自我の立場で書かれた著述こそ真の意味で永遠性をもつた文化財ということができるであろう、」とも言っている。